

日本語パートナーズ 台湾第6期の活動について

「日本語パートナーズ派遣事業」は、日本人ティーチングアシスタントをアジアの中学・高校等に派遣し、日本語授業のサポートや日本の文化紹介等の活動を行う事業で、台湾では独立行政法人国際交流基金から当協会が一部を受託し実施しています。

台湾では、第6期の13名が2022年2月3日から7月1日までの期間、台湾各地の高校に派遣されました。今回はその中から2名の日本語パートナーズの活動を紹介します。

コロナ禍での活動と異文化交流

上西 奈瑠香

日本語パートナーズ事業とは、今は亡き安部元首相が2013年に新しいアジア文化交流政策「文化のWA（和・環・輪）プロジェクト～知り合うアジア～」を発表し、その実現のため国際交流基金がアジアセンターを立ち上げ、発足したプログラムです。そのWAは台湾だけでなく、インドネシアやタイなど東南アジアを中心に10の国・地域に広がっています。

私は日本語パートナーズとして、今年の3月から6月末まで国立花蓮高校にいました。今回で6期となる台湾への派遣ですが、本来なら私は5期として2020年の9月に台湾に渡航するはずでした。しかし、新型コロナウイルスという未曾有の事態により、5期の派遣は中止となりました。希望者のみ6期へ振り替えられ、2021年の9月から派遣される予定でしたが、それも延期となり、今年の2月ようやく渡航が許されました。しかし、台湾に行った私たちを最初に待ち受けていたのは、14日間の隔離でした。部屋から一步も出ることが許されないため、2週間誰とも会うことなく過ごしました。そして3月1日、それぞれの派遣校へ移動し、ようやく日本語パートナーズとしての活動が開始できました。

私たちの役割は、大きく分けて3つあります。

1つ目は現地の日本語教師のアシスタントとして授業のサポートをすること、2つ目は日本文化の紹介をして、現地の人と交流をすること、3つ目は台湾の文化や習慣を理解し、日本人に広めることです。



最初の授業で自己紹介をしているところ

私は実際に台湾人の日本語の先生のアシスタントとして、授業に参加していました。先生が中国語で文法の説明などを行っている間、私は机間巡視をしたり、プリントの文を音読したりしました。そして、ときどき授業時間をもらい、私が準備した日本文化紹介をさせてもらいました。また、昼休みや放課後を利用して、日本語コーナーを開催したり、先生達向けの日本語レッスンをしたりもしました。私は台湾に来たことが何度かありますが、それでも毎日いろいろな発見がありました。面白いこと、びっくりしたこと、そして私が行っている活動などを、毎日SNSに投稿して、日本にいる家族や友人に見てもらっていました。

活動を始めて1か月ほどたった頃、台湾の新型コロナウイルス感染状況がどんどん悪化していきました。それに伴い、学校行事も延期や中止を余儀なくされてしまいました。台湾の行事に積極的に参加することが、私の目標の一つでもあったので、とても残念でした。

5月ごろには、多くの学校で対面授業ができなくなってしまう、日本語パートナーズとしての活動にも影響が出ました。花蓮高校でも、オンライン授業が何週間か続きました。その間、画面上でしか生徒たちと会えないことに空虚感を抱きました。そんな私を気遣ってくれたのか、ある先生が昼食に誘ってくれたり、バドミントンに誘ってくれたりしました。そのおかげで、一人寂しく過ごさず済みました。

対面授業に戻ったのは、3年生が卒業した後でした。日本語の授業は2年生の選択クラスが週に1コマだけという状態でした。そんなとき、他の教科の先生から、1年生対象に文化紹介をしてほしいと頼まれました。できたら食べ物の紹介がいいとリクエストがあったので、焼きそばパン作りをすることにしました。代表的な日本料理とは言えませんが、代表的な購買のパンというイメージが強く、高校生にはうってつけだと思いつきました。また、簡単に作れると思いました。しかし、焼きそばソースと、味の付いていない柔らかいパンが見つからず、いろんな先生に相談しました。現地の材料のことは先生に聞いた方が早く見つかります。それでもイメージしていた長いパンは見



生徒と一緒に作った焼きそばパン

つからず、ロールパンなどで代用しました。当日は昼休みのうちに数人の生徒と事前に焼きそばを調理しておきました。そして、午後の授業で日本の食文化を紹介したあと、自分たちで焼きそばパンを作ってもらいました。それと同時に私が紹介したかったものがあります。それは『マヨネーズ』です。日本のマヨネーズと台湾のマヨネーズは別物なので、生徒たちにも違いを体験してもらおうと考えました。挑戦しない食わず嫌いの生徒もいましたが、美味しいといって食べていた生徒が多かったです。どれだけ生徒たちの記憶に残る文化紹介ができたかは分かりませんが、写真を見せられるだけと実際に体験して（食べて）みるのでは、感じ方が違うと思います。私は日本の素晴らしいところを紹介するというよりは、日本のありのままを紹介できたのではないかと思います。

最後までコロナウイルスの脅威は続きましたが、やりたかった文化紹介などはほとんど出来ました。それもこれも、学校や先生方の協力があってできたことです。私は本当に恵まれた環境で活動ができたと思っています。派遣期間は終わりましたが、これからも日本のこと、そして台湾のことをSNSなどで発信し、日台の架け橋になりたいと思います。

異文化の交差点、台湾で活動して

村井淳一

私達台湾6期13名の活動は、コロナによる入国規制により当初予定から5か月間遅れて2022年2月から始まり、7月初めに5か月間の滞在を終えました。活動期間は短かったものの、全員それを補うべく計画的に、そして積極的に活動し、悔いのない実績を残せたと思います。

私は赴任先である桃園市立壽山高校で、素晴らしい経験をする事が出来ました。赴任期間後半からコロナ感染の拡大で休講が続き、最終的には授業時間の30%が休講やオンライン授業となって授業時間がかかなり不足した状態にもかかわらず、私の当初予定の9割近い文化紹介活動を実施させていただいた上、学校行事である日本語特別クラスの日本語発表会で生徒が発表する原稿文のチェックや翻訳を任せていただけるなど、同校の先生方のご支援には心から感謝いたしております。また地域活動として参加させていただいた社会人日本語クラスの方々からは日本の生活についての質問もたくさんいただき、より深く台湾を理解できたと感謝しております。

私は日本語学校でベトナムや中国留学生に日本語を教えた経験があり、また過去に台湾には短期の旅行と出張で何度か来たこともありましたが、当初、桃園での活動を開始するにあたり、日本語パートナーズ活動として、日本語の授業にネイティブとして授業に参加することや、日本文化の紹介活動については、まったく戸惑うことはないとし、少し慢心していました。

ところが台湾で生活し始めて驚かされたのは、台湾の習慣が中国とはかなり異なっていて、日本文化が予想を超えて台湾の文化に浸透しているという、過去の短期滞在ではわからなかった台湾の本当の姿でした。たとえば食文化で言えば台湾には現地で作られた蒲鉾、ちくわ、羊羹、大福もちなどがローカル資本のスーパーで一般的に販売されていましたし、日本の伝統のうなぎの蒲焼は地元の店がたくさんありました。さらに今まで代表的な日本文化だと思っていた刺身をワサビと醤油で食べる食習慣は台湾人にかかなり深く根付いる上、学校の授業やクラブ活動では剣道、柔道など

が多くの学校で行われているという具合でした。

その一方、日本と台湾には古くから中国文化が流入しているので、中国由来の日本の行事である節分、桃の節句、端午の節句、七夕、お盆、中秋の名月など、日本と台湾では、形は少し違いますが共通していることも多く、過去の自分の経験をもとに、日本で作って来た日本文化紹介のプレゼンテーションは、台湾ではあたりまえのものとして受け取られそうで、本当に困ってしまいました。そこで考え悩んだ末に日本文化の紹介は体験型の文化紹介を中心に行うこととし、浴衣着付け体験、茶道体験、つまみ細工以外にスポーツチャンバラやおにぎり体験などを生徒に体験してもらうことにしました。そして写真を中心とした日本文化紹介のプレゼンテーションを行う時は、台湾と日本の文化の同じ点と異なる点を対比させて説明するようにしました。

面白かったのは、桃園の高校生は、知識はそれなりに大人びているのですが、手先が不器用な生徒が多くて、おにぎり体験では握ったおにぎりがバラバラに崩壊してしまうものが多かったり、茶道体験では茶筌をうまく使えず、抹茶がまったく泡立たなかったりしたのですが、それが生徒たちにとっては逆に新鮮で、とても面白い体験になっ



おにぎり体験、おにぎり崩壊



茶道体験、茶筴がうまく使えない



恒春城南門 日帝統治時代には鉄道が通っていた

たようでした。

すこし台湾での生活に慣れて来て、人々を知れば知るほど、台湾の歴史について興味が湧いてきました。土日祝日と定期試験の時期は、自由な時

間でしたので、各地の歴史博物館やいろいろなテーマを扱った博物館をできるだけ見て回りました。台南の国立歴史博物館、台北の国立台湾博物館や228記念館などいろいろな情報をつなぎ合わ

せると、台湾は、私が今まで参考にしてきた旅行雑誌の紹介記事通りの、笑顔、温泉、おいしい食べ物、親日、故宮博物館に代表される中華文化というだけではなく、中国などからの移民と、もともと台湾に住む原住民族が、スペイン、オランダ、清朝、日本、そして中華民国の統治という歴史を苦しみながら、そして辛抱強く消化して出来上がった文化を持っていることが見えてきました。そして日本国民として終戦を迎えた台湾の人々が、

食料や原材料の生産基地として植民地経営をした日帝統治時代が終わっても、昔の日本の建物を保存したり使ったりするとともに、日本文化をいまだに台湾の文化として保っていてくれることに対し、深い感謝の念を抱くようになりました。私は、台湾と日本が今後も、苦い歴史も成功した歴史も、穏やかにそして冷静に尊重し、お互いに協力的に発展することを願ってやみません。